久保田淳編『日本文学史』

井上隆史

本書は、上代から現代までの日本文学の流れを、九人の執筆者――久保田（上代・中世・近世）、猪狩友一（近代）、伊藤玉美（中古・中世）、久富木原玲（中古・中世）、鈴木健一（近世）、鈴木武晴（上代）、谷知子（中古・中世）、堀川貴司（中古・中世）、山下真史（近代）――が分担執筆し、年表および人名、作品名、事項・用語別索引を附したものである。

作品の例示が具体的かつ適切である点、説話や軍記物語を説明する際に芥川龍之介、谷崎潤一郎、小林秀雄ら近代の文学者にも言及するなど、時代を隔てた繋がりへの配慮が行き届いている点、初歩的基本的な事柄はもとより最新の研究成果も踏まえられている点など、本書は文学史のテキストに望まれる条件を兼ね備えている。しかし、何よりも本書を従来の類書から際立たせているのは、それぞれの執筆者が大きな思考の枠組みを提起し、個々の文学史的事実をその視野の広がりの中で有機的に捉え直そうとしている点である。

「結婚」というテーマに光をあてることによって『古事記』と『萬葉集』との緊密な連関を考察していることや、はじめに「和歌・俳諧と漢詩という和漢の対立・混淆と、和歌・漢詩と俳諧・狂歌・狂詩、さらに川柳という雅俗の対立・混淆というxy軸の立体的関係によって成り立つ総体としての近世詩」といった大まかな見取図を提示してから近世詩歌の具体相に立ち入ってゆくところなどがその例である。とりわけ目を引くのは、日本の近代にはどのような特質があるか？　日本人の〈私〉の構造はいかなるものか？　という問いに特別に一章を割いた上で、「近代文学における表現の変遷と〈私〉の位相に焦点をしぼって文学史の流れ」を追った近代文学史の記述（猪狩・山下の共同執筆）だろう。

事実を図式的に整理しただけの文学史には、私たちは飽き飽きしている。論者独自の思考の枠組みが求められる所以であり、その枠組みの有効性は、それによっていかに多くの事実の意味が浮彫りになるか、どれだけ斬新な視点を提起しうるかによって測られる。「近代の〈私〉」なるものを、「〈個〉としての〈私〉」と「共生する〈私〉」という二つの〈私〉の緊張関係の上に成立するものと考える本書の近代文学史の枠組みは、心境小説の本質を「〈個〉の表現を透徹させてゆくと、〈個〉はそれを支える共生する〈私〉へと回帰し、結果として〈個〉を超えた世界が表現される」という事態に見出し、自由律俳句を「本来俳句がもっていた独自の精神が、近代の〈私〉によって純化された表現」と位置づけるなど、随所に注目すべき考察を提示している。本書には、独自の見解を大胆に打ち出す際の、思考のダイナミズムを如実に感じさせてくれるという楽しみもあり、文学史の講義用テキストという範囲を超えた関心にも、充分応える内容となっている。

（平成八年四月二十五日刊　A5版　三九一頁　おうふう）